負債としての文学

――憶良・道真と白詩について――

東　茂美

一

山上憶良は世間苦をうたう歌人として知られている。「哀世間難住歌一首并序」（巻5八〇四、八〇五）や「貧窮問答歌一首并短歌」（巻5八九二、八九三）がその代表的なものであろうか。それにしても、貧しさや寒さ、過酷な徴税や飢えのあえぎ、おどおどした眼差しと笞にうたれる音、そうした下層民の暮らしを詩歌で切り取り告発して、それに何の意味があるのであろうか。ましてや自らの病を材料に長文をつづり苦にまみれた世間を告発してみて（「沈痾自哀文」巻5八九六左）、いったい何の効能があるというのであろう。おなじように世間苦を五言・七言詩でうたい、平明な表現をもって現実を直叙しようとする菅原道真はどうか。何がかれらを創作へとはしらせるのであろうか。白楽天の詩文を視野において対照してみるとき、その内実の一面が見えてくるように思われる。

二

白楽天は「売炭翁」で、つぎのようにうたっている。一部を引用し一読することから始めてみたい。(1)

売炭翁、伐薪焼炭南山中、満面塵灰煙火色、両鬢蒼蒼十指黒、売炭得銭何所営、身上衣裳口中食、可憐身上衣正単、心憂炭賤願天寒、夜来城上一尺雪、暁駕炭車輾氷轍、牛困人飢日已高、市南門外泥中歇…（「売炭翁」）

終南山の山中で薪をきって炭を焼き、それを都へもって来て売る老人がうたわれている。このあとには、書付けを持った宮中の調達局の役人から、荷車いっぱいの炭を買いたたかれたと、翁の嘆きがつづく。「新楽府并序」の第三十二篇であり、副題に「苦宮市也」とある。いま「新楽府」五十篇の全体を紹介するだけの紙幅はないが、乱世を平定し七徳の舞を作り、その舞によって帝王創業のさまを示したのを賛美した「七徳舞」にはじまり、前代の王が国を乱し亡滅させてしまったのを鏡とし、天子がおのれを諫めることを願った「采詩官」にいたる各篇には、市井に生きる人びとの姿が活写されている。

美しいゆえに宮中の上陽宮に閉じ込められ、伴侶をもつことも許されず老いさらばえた老女（第七篇）、若い頃自ら腕をたたき折り、徴兵を逃れて老いた八十八歳の翁（第九篇）、かつ

ては中国人でありながら、今や「縛戎人」（縛られたチベット人捕虜）にしたてあげられて江南の地に流されていく男（第二十篇）、西涼の獅子舞見物にうつつをぬかす職務怠慢な国境警備の将軍（第二十五篇）、すぐれた才能をもちながら、谷底の高さ百尺十かかえもある松が見出されず老衰枯死するように、貧賤の境遇にある賢人（第二十七篇）、名目だけの免税で苛斂誅求にあえぐ農夫（第三十篇）、自ら身につけることはない綵綾を苦労をして織っている会稽の女工（第三十一篇）、讒言のために放逐されてしまった朝臣（第三十七篇）、専売品の塩を商いもうけた財でぜいたく三昧の塩商人の女房（第三十八篇）など、さまざまな人びとが、同情や皮肉をまじえながら、軽妙な筆致で描写されているのである。

こうした「新楽府」から、憶良の諸作品との類似を指摘していくのは、それほどむずかしいことではない。たとえば、「綵綾」（第三十一篇）の「汗霑粉汙不再著、曳土蹋泥無惜心」から、憶良の「富人の家の子どもの着る身なみ腐し捨つらむ絁綿らはも」（巻5九〇〇）「あらたへの布衣をだに着せかてにかくや嘆かむせむすべをなみ」（巻5九〇一）を思い出すのは容易であろう。「富人の家の子ども」が着ているものは、最下層の農耕民たち、たとえていえば、白楽天のうたう「越渓寒女」（越の山谷の貧家のむすめ）たちが織ったものであった。

「新楽府」の「杜陵叟」（第三十篇）からでもよいが、「秦中吟十首并序」中の「重賦」から、

…織絹未成匹、繰絲未盈斤、里胥迫我納、不許暫逡巡、歳暮天地閉、陰風生破村、夜深煙火尽、霰雪白紛紛、幼者形不蔽、老者体無温、悲喘与寒気、并入鼻中辛…

をあげるなら、ここからはすぐに「貧窮問答歌」が思い出されよう。「陰風生破村」「霰雪白紛紛」はそのまま「風交じり　雨降る夜の　雨交じり　雪降る夜は」であり、「破村」といった荒れはてた村の状況は「伏廬の　曲廬の内に　直土に　藁解き敷」いた殺伐とした風景であろう。「煙火尽」は「かまどには火気吹き立てず」、「幼者形不蔽、老者体無温」は「貧窮問答歌」の前半でうたわれる「麻衾　引き被り　布肩衣　ありのことごと　着襲へども　寒き夜すらを」や後半の「綿もなき　布肩衣の　海松のごと　わわけさがれる　かかふのみ　肩にうち掛け」とおなじである。「悲喘与寒気、并入鼻中辛」は「しはぶかい　鼻びしびしに」であろうか。あるいは、悲しい喘ぎと冷たい夜気が鼻に入ってきて辛いというのであるから、「憂へ吟ひ」「ぬえ鳥の　のどよひ居る」でもあろう。「里胥迫我納、不許暫逡巡」は、「しもと取る　里長が声は　寝屋処まで　来立ち呼ばひぬ」にほかならない。

「里長」は「戸口を検校し、農桑を課せ殖ゑしめむこと、非違を禁め察む、賦役を催し駈はむこと」（『戸令』）が職掌。憶良は里長に「しもと」（笞）を握らせて登場させているが、「しもと」は権力の末端にあるかれにとっては支配の象徴であり、「笞」罪は郡司のレベルでも刑の執行がゆるされてもいたから、逆に「我よりも　貧しき人」たちにとっては、もっとも身近にあって避けがたい刑具でもあった。「里長」は「寝屋処まで」踏み込んでわめき、猶予も与えずしきりに納税を督促するのである。(2)

「傷唐衢二首」と題された白詩に「憶昨元和初、忝備諫官位、是時兵革後、生民正顛頓、但傷民病痛、不識時忌諱、遂作秦中吟、一吟悲一事」とあり、「秦中吟」は民衆の辛苦をいたんでうたったという。別に「与元九書」では「聞秦中吟、則権豪貴近者、相目而変色」と、支配層では物議をかもし激しい批難をあびたらしいが、その一方で「昨過漢南日、適遇主人集衆楽娯他賓。諸妓見僕来、指而相顧曰、此是秦中吟・長恨歌主」とあって、かれが生きていた当時から、その平易なうたい口によって、ひろく巷で喧伝されていたようである。

もちろん白楽天が生まれたのは、中唐の代宗時代の大暦七年（七七二）。誕生は杜甫が没した翌々年であり、会昌六年（八四六）に七十五歳で没している。したがって、かれは九世紀前半の詩人であり、天平五年（七三三）に没したと思われる憶良が、後代それも海彼の地に、こうした詩人が登場してくるとは、知るよしもなかったであろう。もとより両者の間に、享受・非享受の関係を持ち込んで、その表現の類似を論うことはできない。

つとに佐佐木信綱氏が、憶良の「貧窮問答歌」と『白氏文集』の「村居苦寒」「納粟」との間に酷似する表現があることにふれて、「恐らくは、同じ東洋の歌人また詩人としての物の感じ方に相通ふところがあり、社会生活の態様などに於いても、おのづから相似たる下層農民生活状態が存して居たりしことによるのであらうと思ふ」[3]と述べられている。近似する表現を考える場合、おそらくこういった理解に落ち着くのが、一般的であろう。

たしかに、わざわざ白詩に類似をもとめなくとも、「貧窮問答歌」にかぎってみても、これまでに「逐貧賦」（漢・揚雄）、「貧家賦」（晋・束晳）、「詠貧士」（晋・陶淵明）から、初唐期の詩人と思われる王梵志の詩篇にいたるまで、多くの作品との類似が指摘されている。ことに陶淵明の「詠貧士」は、ほかの憶良の作品と陶潜のそれに類似する点が多いこともあって、しばしば影響関係が論じられてきた[4]。もちろん憶良が『陶潜集』の読者であり直接影響をうけているとするには、対立する異論もあって、いまだ定説をみない。

こうした陶淵明からの直接の影響関係があるかどうかは、いうまでもなく、憶良（取り入れる側）に先行して陶潜の作品（取り入れるもの）があってこそ、はじめて論の俎上になる。そうであれば、ここで白楽天と憶良とをならべ比較しようというのは、いかにも吟味を欠いた試みのようにも映るであろうが、はたしてそうか。

三

菅原道真が『白氏文集』を学んでいたことはいうまでもない。讃岐国守の時代に「客舎書籍」と題する詩があり、ここでは京から讃州へ持ってきた書籍を「百一方資治病術、五千文貴立言虚、諷吟白氏新篇籍、講授班家旧史書」とうたっている。「百一方」は医方書、「五千文」は『老子道徳経』（いわゆる『老子』）で、白楽天にも「逍遥無所為、時窺五千言、無憂楽性場、寡欲清心源」（「養拙」）、あるいは「言者不如知者黙、此語吾聞於老君、若道老君是知者、縁何自著五千文」（「読老子」）

と見えるもので、大道上徳を説き、五千余字あるところから、たんに「五千文」と呼んだらしい。「班家旧史書」は後漢の班固が撰した『漢書』をいい、いわゆる紀伝道では『史記』『漢書』『後漢書』の三史と『文選』は重要なテキストである。道真には文章得業生時代の作品に「喜雨詩」があって、五言八十字の各句に漢代の良吏を詠み込んでいる。博士となって『後漢書』を講じており（元慶三年・八七九年冬～五年・八八一年夏）、史書に通暁していたことはまちがいなく、讃州でも講じるために運んだのであろう。こうした書籍とともに「白氏新篇籍」も荷造りしたというのである。川口久雄氏によれば、『白氏長慶集』『白氏文集』『元白唱和集』『劉白唱和集』の類であったらしい。[5]

後に大宰府の謫居でうたった「詠楽天北窓三友詩」「不出門」「敍意一百韻」は、周知のように、創作にあたってこの『文集』が色濃く投影している。「白氏洛中集十巻、中有北窓三友詩、一友弾琴一友酒、酒之与琴吾不知、吾雖不知能得意、既云得意無所疑」（「詠楽天北窓三友詩」）とうたうが、これは題にいうように白詩の「三友者為誰、琴罷輒挙酒、酒罷輒吟詩、三友遞相引、循環無已時」（「北窓三友」）を享けたもの。[6]ただ道真はつづけて、「不須一曲煩用手、何必十分便開眉、雖然二者交情浅、好去我今苦拝辞、詩友独留真死友」といい、酒と琴とはあまり親しまなかったようで、詩こそ真の友であるとうたっている。「好去」は白詩にも「南湖連西江、好去勿踟躕」（「放魚」）、「好去今年江上春、明年未死還相見」（「送春帰」）などと見える唐の俗語である。道真が住むのは、茅茨で屋根を葺いた粗末なわずか三間ばかりの家であったが、書斎むきの北窓があり、そこで起居していたらしい。「適来良友穏相依、無酒無琴何物足」と、「良友」（詩）がわが身によりそってくれることを、何よりの慰めとしている。かれにとって詩とは、「父祖子孫久要期、只嫌吟咏渉歌唱」と、人びとの口の端にのぼって流行し歌唱されるのを好ましいことではないというのである。ここには先に述べた白詩をじゅうぶん意識したうえでの、批評的な態度もあろう。

このような道真における白楽天の影響は、時代的にいっても至極あたりまえであるともいえようが、さきにあげた白詩に即して近似する作品にふれてみよう。「問薗笥翁」「代翁答之」「重問」「重答」の一連の作は、こうである。「問尓皤皤一老人、名為薗笥事何因、生年幾箇家安在、偏脚句瘦亦具陳」。巷で薗笥と呼ばれている、偏脚で句瘦の老人が登場し、その老人に名前の由来を聞くところから、この連作は始まっている。「皤皤」は髪の白いさまである。名のゆらいを問われた翁がいうことには、いぐさを編んで入れ物を作るのを生業として、すでに齢六十、たちのよくない腫れもので爛れ歩行もおぼつかないが、子どもの頃からずっとこういうありさまであった、と（「代翁応之」）。道真が重ねて問う。「近前問汝更辛酸、年紀病源是老残、売笥村中応賤価、生涯定不免飢寒」（「重問」）。耕作に耐えられぬ障害を負いながら、飢えと寒さとに苛まれて年老いた、「薗笥」と呼ばれる人物の暮らしに、道真は同情の念をかくせない。この「薗笥」のありさまは、実際に讃岐国庁の近くにそうした老人がいたかもしれないが、明らかに白詩「売炭翁」に着

想を得ている。

もちろん両者にちがいもある。白詩では「一車炭重千余斤、宮使駆将惜不得、半匹紅紗一丈綾、繋向牛頭充炭直」と、米一斗千五百文する相場の市場で、荷車に積んだ炭をせいぜい四百文ほどしかしない紅の絹と一丈の帛で、搾取する官吏の横暴を告発しておわるが、道真詩では「扶杖帰時斗米提」と、薤笥の翁が一斗の米をさげて帰ったことをうたっている。これは『戸令』にいう「凡そ鰥寡、孤独、貧窮、老疾の、自存するに能はずは、近親をして収養せしめよ。若し近親無くは、坊里に付けて安置せしめよ」の条に則って、道真が官物を支給したというのであろう。

別に「路遇白頭翁」では、頭に白髪をいただき、妻も子もなく茅葺のあばらやに住んでいながら、元気のよい九十八歳の翁が登場する。この翁に、かつて疲弊しきっていた讃岐国が、安倍興行や藤原保則といった良吏の善政によって安定し、翁自身も「無妻不農心自得、五保得衣身甚温、四隣共飯口常食、楽在其中断憂憤、心無他念増筋力、不覚鬢辺霜気侵、自然面上桃花色」であると語らせている。翁のもの言いは『後漢書』に記された蘇章・廉范・張堪伝などのエピソードによって占められており、[7] どこまでが興行や保則の事績であるか明瞭ではないものの、「問薤笥翁」をうたう道真に、こうした良吏に繋がろうとする意識があったことはまちがいあるまい。

さらに憶良の作品を視野に入れて、白楽天と道真との関係を見ようとするなら、道真の「寒早十首」は、やはり言及すべき作品であろう。

何人寒気早、寒早走還人、案戸無新口、尋名占旧身、地毛郷土瘠、天骨去来貧、不以慈悲繋、浮逃定可頻　（第一首）

「寒早十首」は、耕地を棄て他国に逃亡したものの、やがて捕縛され送還されてきた者（走還人）からうたい始められている。以下、他国を逃亡して讃岐国に流れ着いた浮浪者（浪来人）、病んでいる老いた鰥夫（老鰥人）、はやくに父母をうしなった孤児（夙孤人）、たとえ病気になっても、わずかの薬さえ与えてもらえない薬草園の人夫（薬圃人）、寒いさなか単衣しかなく、痩せ馬に荷を載せて運ぶ馬子（駅亭人）、土地も持たず船に雇われ賃仕事で暮らす水手（賃船人）、いくら魚を釣っても、貧しい暮らしさえ支えることのできない漁師（釣魚人）、市場を大手の商人に独占された零細な塩売り人（売塩人）、そして最後の、危険を顧みず伐り出した材木を買いたたかれる樵（採樵人）にいたる、社会の底辺でかろうじて生きている人びとがうたわれている。道真のうたう「売塩人」は、白詩「秦中吟」（第三十八篇）に見られた塩商人と、ちょうど反対側に立たされた人びとの辛苦を、描写したものとなっているのに気づかれよう。

各詩の「何人寒気早…寒早…人」といったうたい口や「人」「身」「貧」「頻」で押韻するといった体式は、白詩「和深春二十首」の「何処春深好…春深…家」で、「好」「家」「花」「車」「斜」で押韻しているのを模したものである。白楽天は「富貴家」「貧賤家」「執政家」「方鎮家」「刺史家」「学士家」…「嫁女家」「聚婦家」「妓女家」と、さまざまな家の春のありさまを

うたっている。

これはもともと元稹の「深春」に和して創作したものらしいが、「深春」は散逸して見ることはできない。ただ元稹には「生春二十首」が残されており、これもまた「何処生春早、春生…中」でうたいはじめ「中」「風」「融」「叢」と押韻する体式で、「雲色中」「漫雪中」「霽色中」「曙火中」「暁禁中」「江路中」…「老病中」「客思中」「濛雨中」と、春が生まれてくる物象・人象のさまざまを題材にしている。道真はこうした白楽天らの作品を正面に見すえて、その体式を積極的に模倣しながら「寒早十首」を創作したのであろう。

もちろん道真がうたうのは寒気が迫る下層民の暮らしであり、次第に木々が緑を濃くする晩春ではない。似るのは、白詩でいえば二十首のうちの第二首「何処春深好、春深貧賤家、荒涼三径草、冷落四隣花、奴困帰傭力、妻愁出賃車、途窮平路険、挙足劇褒斜」くらいで、内容に類似点があるわけではない。とはいえ、「新楽府」や「秦中吟」を知る道真が、赴任した讃岐国で「寒早十首」にそれほど辛労したとは考えられない。かれの詩文を読み、そこに白詩を踏襲し創作していった軌跡をたどることは、比較的容易な追試に属するように思われる。

四

憶良が生きたのは、一説によれば、斉明天皇六年（六六〇）から天平五年（七三三）であるといわれている。道真が生まれたのは、憶良の死から一一二年後の承和十二年（八四五）である。それからおよそ六十年を生き、延喜三年（九〇三）に大宰府で没している。この憶良と道真との間に、直接の影響関係を明らかにしようとする中西進氏の論がある。つまり、道真が憶良をすぐれた先人とみなし、その作品に倣うところがあったというのである。[8]

中西氏は、たとえば道真の作「慰少男女」から、

少男与少女、相随得相語、昼飡常在前、夜宿亦同処、臨暗有燈燭、當寒有綿絮、往年見窮子、京中迷失拠、裸身博奕者、道路呼南助…

をあげて、道真が子と起居を共にし食事をして寝につくさまは、「貧窮問答歌」で登場する一家を想起させ、語句の「綿絮」「窮子」「失拠」なども「貧窮問答歌」の世界にひとしいと述べられている。

また憶良がうたう飢寒・老苦・病苦・子への煩悩などのモチーフも、道真詩「雨夜」に多くの共通性を指摘されている。「雨夜」には「心寒雨又寒、不眠夜不短」とうたわれ、「失膏槁我骨、添涙渋吾眼」などは「風交じり　雨降る夜の　雨交じり雪降る夜は…しはぶかひ　鼻びしびしに　然とあらぬ　ひげ掻き撫でて」、さらに病気をうったえる「脚気与瘡癤、垂陰身遍満」は、「沈痾自哀文」（巻5八九六左）の「四支不動、百節皆疼、身体太重、猶負鈞石…」に似ており、「況復厨児訴、竈頭爨煙断」は「貧窮問答歌」の「かまどには　火気吹き立てず」を連想させる。また、「此治遂無験、強傾酒半盞」と酒を飲んで憂情をはらうさまは、「すべもなく　寒くしあれば　堅塩を取りつづしろひ　糟湯酒　うちすすろひて」であり、「天道之

運人、不一其平坦」は「天地は　広しといへど　我がためは　狭くやなりぬる　日月は　明しといへど　我がためは　照りや給はぬ」の感慨とおなじであるといわれる。

憶良と道真の作品のあいだに、中西氏は多くの共通性をあげながら、左降され大宰府の地にあった道真が、「この地における先人としての憶良の作を、顧みるところがあったと考える方が自然であろう」（中西論）とされるのである。

もちろん道真の作品に憶良を見ようとするなら、大宰府時代だけに限られるわけではない。すでに紹介したが、讃岐国守時代の作「問商笥翁」で老人が立ち現れるさま「偏脚句瘻亦具陳」は、憶良が「哀世間難住歌」でうたう「手束杖　腰にたがねて　か行けば　人に厭はえ　かく行けば　人に憎まえ」巷をうろつくさまが想起され、同じ讃岐作の「寒早十首」にうたわれる人びとのさまは、はやくに川口氏が「貧窮問答歌ともいうべき秀作である」[9]といわれるように、「貧窮問答歌」に登場してくる人びとに似ている。道真は詩中で、他国へ逃亡しながら送還されてきた人をうたい「天骨去来貧」といい、水手をうたって「行棹在天貧」というが、これは「貧窮問答歌」の先にあげた「天地は…日月は…」と相通じるであろう。貧しさは天性なのである。道真は「不以慈悲繫、浮逃定可頻」と、「浮逃」つまり税の重さに浮浪逃散した人びとを「寒早十首」の第一首目においてうたっている。それは憶良が「令反惑情歌一首并序」（巻5八〇〇、八〇一）で「蓋是亡命山沢之民」と関心をよせた人びとでもあった。

周知のように、憶良は最晩年の作として「士やも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして」（巻6九七八）を残している。これは藤原八束が使いとしてよこした河辺東人を前に、「有須拭涕、悲嘆、口吟」したものであるという。この「士…立名」が、『孝経』（開宗明義章）の「立身行道、揚名於後世、以顕父母、孝之終也、夫孝始於事親、中於事君、終於立身」に根底にもつ、憶良年来の「自己認識」[10]であったことは、説かれてすでに久しい。

他方、道真は「若不揚名資禄養、何愁暦尾数行余」（「書懐、寄安才子」）と若い大学寮在学の学生を激励し[11]、また「不患顔疵患名疵、功名未立年未老、毎願名高年又耆、況名不潔徒憂死…雖因詩與居疑罪、言者何為不用詩」（「有所思」）と、いわれのない嫌疑に詩をもって自らの衷情を訴えている。老大納言藤原冬緒の進退について誹謗する匿名の詩が宮中でばら撒かれ、これが道真の作であるという流言蜚語に反駁してうたったものである[12]。

それゆえに、大宰府の配所では「職豈図西府、名何替左遷、貶降軽自芥、駈放急如弦」（「紘意一百韻」）と悲嘆する。大宰員外の帥という天涯の地の職を与えられ、正三位右大臣・右大将の身の上から引きずり降ろされて、「左遷」という名にかわったという[13]。じつはこれに先立って、道真には同じ年に「読開元詔書」の一作がある。この年に昌泰から延喜に改元され、その詔書を読んだ感慨を五言にしたもので、「茫々恩徳海、独有鯨鯢横、此魚何在此、人謂汝新名…哀哉放逐者、蹉跎喪精霊」というのが、後段である。「独有鯨鯢横」には「具見于詔書」の分注があり、どうやら改元の詔書には、広大な天子の恩徳の

海にあって、貪婪に海の幸を食い荒らす鯨がいると書かれており、それは逆臣の巨魁として道真をそしった語句であったらしい。

世間の噂では、それが名を汚し失った道真にあたえられた新しい名であるというのである。それを知った道真は、もはやわが身を支えることもできず、生ける屍同然であるとうたう。道真はついに名をすてることができなかったことにおいて、かの憶良と帰着するところは同じであるというべきかもしれない。

五

これまで憶良と白楽天、白薬天と道真、そして憶良と道真と、それぞれの作品を対照しながら、相互に類似する表現の幾例かを例示した。こうして見られる三者の関係のうち、道真と白楽天との関係は、いまさらながら喋々するまでもあるまい。それにまた憶良と道真との関係も、道真が『新選万葉集』の原撰者であり、その序の「夫万葉集者、古歌之流也、非未嘗称讐策之名焉、況復不屑鄭衛之音乎」という評価が、道真のものでもあったとみるかぎり、けっして無視することはできないであろう。

それでは憶良と白楽天とはどうであろう。中西氏は憶良が「白詩に近い」[14]のは、大宰府という門戸としての都市が人間的な活性にみち、そのもつエキゾチズムが文化の革新にあらわれ、異国との交渉による社会の混淆性が人間の発見へと働きかける、それが憶良の滞宰作品であり、〈白詩的なるもの〉であったとされる。さらに道真は白楽天の影響を享けながら、かつての憶良が先取りしていた〈白詩的なるもの〉を明瞭にかたちにしたのであり、そう積極的に働きかける活性が大宰府に存在したと論じられるのである。

なるほど憶良にしても道真にしても、滞宰時代の作品にしぼってみると、「白楽天を中心におく、旅人・憶良と道真の文学的構図」（中西論）が際やかに見えてくる。とはいえ、憶良には筑前国守以前の作品は少なく、大半が大宰府時代のものでしかなく、比べようがないが、道真には配流前の膨大な作品が残されており、すでにその一部を見てきたように、白詩は、はやい時期から道真の創作に大きな影響を与えているといってよいであろう。中西氏はまた憶良の作品を、「白詩以前に白詩の世界を、いわば先取りした」と述べられ、三者の生きた時代に配慮しながら、論を展開するうえで享受・非享受の転倒をおこすことのないように、慎重に『白詩文集』の伝来を検討されてもいる。作品を対比しながら類似する語句を指摘するだけにとどまらず、ここには批評のたしかな眼による展開がなされているといっても、過言ではないであろう。

しかしながら、やや乱暴ないい方になるが、時間を軸として見た場合、かりにそれが時代的に転倒したかたちであっても、享受・非享受の枠をはずしたところの、憶良と白楽天との比較研究もあってよいのではないか。比較研究というのが不都合であれば、それを対照研究といってもよい。憶良は「作一章之歌、以擬二毛之嘆」（巻5八〇四、八〇五序）とつづり、あるいはまた「意内多端、口外難出、謹以三首之鄙歌、欲写五蔵之鬱結」（巻5八六八～八七〇序）と、創作によって老いの嘆き

や心中もろもろの憂さを慰めるという。「沈痾自哀文」では、長大な漢文をつづり、さらに自らを納得させるかのように細かい分注をほどこしている。就中、『志怪記』『寿延経』『帛公略説』『遊仙窟』『鬼谷先生相人書』などに依拠しながら「知生之極貴、命之至重」と結論を導き出しながらも、「欲言言窮、何以言之、欲慮慮絶、何由慮之」とさへ、つづっていくのである。すでに別稿で述べたように、「沈痾自哀文」からは、創作にひたすら自らをそわせながら、それでいて言い尽くせない・書きつくせないという焦燥とあらたな創作への衝動に、つき動かされていく憶良のすがたを見ることができるであろう。[15] 詩歌の創作は憶良を慰撫したであろうが、それと同時に、「五蔵」(巻5八六八)をはなはだ傷めるものでもあったはずである。[16] それでもなお憶良を詩歌の創作にはしらせるものを、かりに白詩に対照して形容するなら、後に述べる「詩魔」というべきかもしれない。

白楽天は「新楽府」の序文で「総而言之、為君、為臣、為民、為物、為事而作、不為文而作也」とつづっている。これは元稹に対して書き送った、

洎周衰秦興、採詩官廃、上不以詩補察時政、下不以歌洩導人情…擢在翰林、身是諫官、月請諫紙、啓奏之外、有可以済人病、裨補時闕、而難於指言者、輒詠歌之、欲稍稍遞進聞於上　(「与元九書」)

という内容にひとしい。周知のように、これははやくに『詩経』に見られる詩歌の原論に即した主張であるといってよい。したがって、「新楽府」中の「采詩官」では、「君之堂兮千里遠、君之門兮九重閟、君耳唯聞堂上言、君眼不見門前事、貪吏害民無所忌、奸臣蔽君無所畏…君兮君兮願聴此、欲開壅蔽達人情、先向歌詩求諷刺」と、一字一句にこめて作られた「文」は政治に直結していくものであり、「上以風化下、下以風刺上、主文而譎諫」(『詩経』序)こそ使命とするものでなければならないというのである。いわゆる〈諷諭詩〉のあるべき姿を主張する。

少稿の冒頭に白詩の「新楽府」や「秦中吟」の一部を紹介したが、これらが「新楽府」の序文に書かれているように、伝統的な詩歌観に支えられたものであること、そして憶良の「令反惑情歌」「貧窮問答歌」や道真の「寒早十首」「路遇白頭翁」「問菌笥翁」などの作品もまた、こうした系脈につらなるものであることを証するのに、いまさら多言を要すまい。

とはいえ、白詩につぎのような作品があることを留意しておくべきであろう。

自従苦学空門法、銷尽平生種種心、唯有詩魔降未得、毎逢風月一閒吟　(「閒吟」)

両鬢千茎新似雪、十分一醆欲如泥、酒狂又引詩魔発、日午悲吟至日西　(「酔吟二首」その第二首)

仏法を学びさまざまな煩悩は銷すことができたものの、「詩魔」だけはどうにも降伏させきれないという。老いて両鬢は雪のように白くなったが、酒を飲めばまたしてもや「詩魔」を呼び起こし、正午から西に陽が傾くまで創作に熱中していたという。「詩魔」とは白楽天を詩作に駆り立てる、やむにやまれぬ情動をいうのであろう。これといって創作に目的があるわけで

はない、創作そのものが合目的化している創作つまり「為文而作」の詩作に、白楽天を駆り立てていく情動が「詩魔」であった。[17]

これはまた道真の場合も同然であろう。「苦味鹽焼木、邪羸布當銭、殺傷軽下手、群盗穏差肩、魚袋出垂釣、簪筆換叩舷、貪婪興販米、行濫貢官綿、鮑肆方遺臭、琴声未改絃」(「敍意一百韻」)と、詐欺行為でまんまと金儲けをしている輩や殺人傷害が日常茶飯事で横行する盗人、職務怠慢で釣りをしている官人、あくどい米相場で儲けている商人、いかさま商売に手をそめ商品を没収される綿商い、生臭さのこびりついた魚市[18]、いたずらに野卑な音楽など、巷の暮らしを活写しながら、それでいて道真は「与誰開口説、唯独曲肱眠」とうたい、ついに「敍意千言裏、何人一可憐」と、誰かこの百韻を読んで一度くらいは憐れんでくれるであろうかと結んでいる。白詩に「東南行一百韻」があり、道真がこれに学んだことは明らかであり、ひそかに詩友紀長谷雄を読者として創作したとも考えられるが、連綿と連ねられた聯句からうかがえるのは、こうした創作がとりたてて読者を想定したものというのではなく、創作すること自体すでに目的化しているということであろう。

先にふれた「詠楽天北窓三友詩」では、こうである。「…古之三友一生楽、今之三友一生悲、古不同今今異古、一悲一楽志所之」。かの白楽天は三友(琴・酒・詩)を生涯の楽しみの友とし、かたや今の自分にとっての三友(ことに詩)は一生の悲しみの友となった、それは仮に異なったものであったにしても、心情さながらにうたう点では同じではないかというのである。とはいえ、白楽天が詩歌の創作をくりかえし、それを「悲吟」と形容していることに、道真の理解が及んでいなかったとは考えられない。自らの意思の如何んによらず、やめようとしてもやめられない創作、それが「非吟」であり、道真もまた「詩魔」につき動かされるように創作にはしるのである。

六

比較研究の大概は、源泉論はいうまでもなく、享受・非享受つまり影響のありなしが大前提となっている。そのためには「取り入れる側」に、「取り入れるもの」の存在が確証されないかぎり、たとえ類似があったにしても、所詮それは暗合にすぎないとして排除されるのが常道であったといってよいであろう。「取り入れる側」と「取り入れるもの」との間に直接の関係が想定できない場合には、もはや研究の対象とはならないということである。

すでに紹介したように、寸言した事例でいえば、陶淵明の影響ありやなしやの論議は、まず『陶潜集』の伝来が確定されなければならず、たとえそうでなくとも、六朝時代から初唐期にかけて淵明が広く知られ海彼で喧伝されていなければならず、そうでないのであれば、淵明の「詠貧士」は『文選』や『芸文類聚』に収められた「其一」と「其四」にかぎるべきであり、ましてや「其一」「其四」には、これまでに指摘されている類似の表現はないから、影響関係を云々するのは的外れであるという立場である。こうして出典を厳選しながら、享受のありようを明らかにする比較研究からうける裨益は、なるほど大き

い。

しかしながら、比較研究のこれからは、ひとつの共通する支点に立った対照研究の試みもあってよいのではないか。これまでに述べてきた憶良・道真と白詩についていうならば、以下のようにいえるかもしれない。白詩「江楼夜、吟元九律詩成三十韻」には、こうである。

昨夜江楼上、吟君数十篇、詞飄朱檻底、韻堕渌江前…酬答朝妨食、披尋夜廃眠、老償文債負、宿結字因縁、毎歎陳夫子〔陳子昂著感遇詩、称於世〕、常嗟李謫仙〔賀知章謂李白為謫仙人〕、名高折人爵、思苦減天年〔李竟無官、陳亦早夭〕、不得當時遇、空令後代憐、相悲今若此、溢浦与通川（「江楼夜、吟元九律詩成三十韻」）

白楽天は元稹から送られてきた新律詩を吟じているうちに、古人のことが思われてならないとうたう。華美な六朝の詩風を一変させ、高雅堅実な初唐詩を確立しながら、ついに獄死した陳子昂の、賀知章から「謫仙人」と絶賛されながら、潯陽につながれ夜郎に流された李白の、時の不遇を嘆きそこに自らの懐いをよせている。

それよりなにより、元稹に送るべく創作している自画像の描写に注目されよう。創作にわれを忘れ朝食をとらないこともあり、元稹の作品集を読みふけって寝るのさえ忘れる始末。これを白楽天はこの世に生まれおちる以前（過去世・過去過去世あるいはそれ以前）からの因業であると自省する。これほどまでに文字を連ね表現を研き「為文而作」（「新楽府」序）に刻苦しているのは、前生でよほど文字の負債を背負ったからではないか、それゆえに今生それも老いてなお、それを償還しつづけなければならないのではないかとうたうのである。自らの情動を文字との奇しき宿縁としてとらえ、輪廻の宿業として文字をあがなう、いわば「負債の文学」としての創作をひたすら重ねていくのである。

こうしてみると、五戒のひとつである「不妄語」を自覚し、「自有修善之志、曽無作悪之心」といいながら、それでいて「俗道」にある嘆きをつづる憶良も、「此賊逃無処、観音念一廻」（「偶作」）と仏への捨身と帰依をうたいながら、なお「雁足黏将疑繋帛、烏頭點著思帰家」（「謫居春雪」）と自分を蘇武や燕丹子になぞらえ、望郷の念を一文字一文字に刻まずにはいられなかった道真も、「負債の文学」の地平からたち現れた人びとであったように思われる。

注（1）以下、白楽天の作品は詩を『全唐詩』（巻四二四～四六二）、文を『全唐文』（巻六五六～六八一）所収によるが、一部用字を改めたところがある。

（2）このあたりは拙稿「皮膚感覚―憶良文学の身体性Ⅲ」『人文学研究』第5輯で述べた。

（3）佐佐木信綱氏「憶良と白楽天」『短歌読本　山上憶良』。引用は井村哲夫氏『万葉集全注』（第5巻）による。

（4）たとえば、清水房雄氏「貧窮表現の一類型」『万葉集Ⅰ』（日本文学研究資料叢書）、辰巳正明氏「貧窮問答歌論」『万葉集と中国文学』など。

（5）川口久雄氏『菅家文草　菅家後集』（日本古典文学大系）

当該詩の補注による。

(6) このあとに白楽天は「古人多若斯、嗜詩有淵明、嗜琴有啓期、嗜酒有伯倫、三人皆吾師」とうたっている。詩の師は陶淵明であるという。作品にも陶詩のスタイルをまねた「效陶潜体詩十六首并序」や廬山に遊んだときに陶潜を追思した「訪陶公旧宅并序」といったものを見る。憶良・道真のあいだに白楽天をすえて考えてみようとする場合には、これまで憶良との関係が論議され、かつこうして白楽天が連なろうとした陶詩も視野にいれるべきであろうが、ここではふれ得ない。白楽天と陶潜との関係については、松岡榮志氏「白居易と陶淵明」(『白居易の文学と人生II』所収)参照。

(7) これは、はやい時期の作である「喜雨詩」で、句ごとに漢代の良吏の名を用いて創作しているのに似る。「喜雨詩」では、朱博・薛宜・児寛・汲黯・諸葛豊・朱邑・王城・蕭育・何武・公孫弘・杜延年・趙広漢・龔遂・王尊・尹翁帰・馮立の十六名をあげている。こうした良吏のエピソードが、道真ら官吏社会の成員の規範となっていたことはいうまでもない。ことは憶良の場合もおなじである。憶良については、蔵中しのぶ氏「良吏伝と儒教思想—道君首名伝を中心に—」「良吏の文学—山上憶良『令反惑情歌』と道君首名伝」(『奈良朝漢詩文の比較文学的研究』)にくわしい。

(8) 中西進氏「憶良・道真と大宰府」『中西進万葉論集』第3巻。

(9) 川口氏 注5と同書。

(10) 村山出氏「憶良の絶唱—『士也母』の発想—」『山上憶良の研究』。

(11) このとき道真は少内記、二十七歳。

(12) 式部少輔・文章博士、三十八歳。

(13) この年、道真は五十七歳。

(14) 中西氏は憶良とともに大伴旅人についても言及されているが、煩雑になることをさけ、ここでは旅人の作品と白詩の関係についてはふれない。

(15) 「沈痾自哀文」については、拙稿「輪廻する〈憶良〉—『沈痾自哀文』論」(『成城国文学』第8号)、「病との対峙—『沈痾自哀文』論II」(『福岡女学院大学紀要』第2号)、「いのちの考察—『沈痾自哀文』論III」(同上誌第3号)、「貪る〈生〉—『沈痾自哀文』論IV」(『国語と教育』第17号)、「過往の〈遊〉—憶良『沈痾自哀文』—」(『万葉の風土・文学』所収)、「痾に沈む—『沈痾自哀文』論VI」(『福岡女学院大学紀要』第6号)で述べた。

(16) 漢の揚雄は「甘泉賦一首并序」を作った際に、疲れはてて五臓が体外に出てしまい、それをまた腹におさめたという夢をみたが、そのあくる日に死んだというエピソードがある(桓譚『新論』)。

(17) このあたりは平岡武夫氏『白居易』、興膳宏氏「白居易の文学観—『元九に与うる書』を中心に—」(『白居易の文学と人生I』所収)にくわしい。白詩については平岡氏の論に学んだところが多い。

(18) 「鮑肆」は『家語』の「与善人居、如入芝蘭之室、久而不聞其香。与不善人居、如入鮑魚之肆、久而不聞其臭。皆与之化矣」によるという。大系本、当該詩の補注を参考。